

---

# とある魔術の詠唱呪文

SE7EN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術の詠唱呪文

### 【Nコード】

N8726W

### 【作者名】

SE7EN

### 【あらすじ】

気がつくとそのこは学園都市だった。人口二三〇万人の最先端科学都市。超能力が科学によって証明された街で、少年は詠唱呪文の力を得た魔術師として転生したのだ。

## M a g i c 0 (前書き)

作者の妄想と理想を融合させたような小説です。  
合わない方には戻るのボタンを押して下さい。

さてさて、自分に何が起こったのか理解する時間が必要みたいだ。道の真ん中に立ったままでは通行人の邪魔になる恐れがある、と言つかじつと突っ立っていたら変な人に見られるかも知らない。

と言う訳で、彼、かみお きりこ上尾桐戸は取りあえずベンチに腰を下ろしてみた。

少しずつ分かっている事を整理しようと、ブツブツと声に出していく。

まず、ここは学園都市。

でもって、俺は転生した。

なぜか、こちらの知識が頭の中にある。

何でも、柵川中学の二年らしい。

ただし、能力者ではないらしい。

なぜなら、

「メラ」

詠唱と共に手のひらに火の玉が形成される。

ジュッとその火の玉を握りつぶす。

「……マジかよ」

能力者ではなく、魔術師。

それも、この世界の法則ではない、異世界の法則。

詠唱だけで、魔法を扱う魔術師。

「おいおい、そんな設定大丈夫かよ」

詠唱呪文。

この世界で必要とされている下準備が全く不要の、反則の様な魔術だ。

もちろん、メリットだけではなく、声に出さなければならぬと言つてメリットもあるが、それでも唱えられる呪文の数を考えてみれば、メリットの部分が大きすぎる。

ただ、この力を持って自分は何をすればいいのだろうか？

元々、この世界の住人ではない彼がこの世界に介入することで、世界のバランスが崩れたりする可能性も無きにしも非ずだ。

だが、

轟！ と目と鼻の先の銀行のシャッターが大きな爆発と共に崩れ落ちた。

「おい、速くずらかるぞ！」

目の前で銀行強盗発生。

さらに周囲を見渡してみれば、

（なんか小さい子が多いぞ！？）

よく見れば、シャトルバスが止まっている。

大方、施設見学か何かだろうか？

そんな近くで強盗が発生してしまった。

（ああーこんな介入するしかないじゃん！）

上尾桐戸は走り出す。

被害は少ない方がいいに決まっている。

が、走り出した足は直ぐに止まってしまふ。

「ジャケット風紀委員ですの。無駄な抵抗はお止めになることをオススメしますわ」

（風紀委員。確か学園都市の治安を守る機関だったっけ？）

しかし、相手は三人。さすがに女の子一人では荷が重いだろう。

（どっちみち、介入するしかなさそうだ）

だが、以外過ぎるほどに事件は淡々と解決に進んで行くのだ。

三人が弱い、と言うより風紀委員の女の子が強い。

時折見せるのはレポート空間移動。

さすがは学園都市の治安を守る、と言うだけの事はあって、強い。強盗の中にも能力者はいたようだったが、あつという間に一人は地面に伸びて、一人は地面に押さえつけられてしまった。

（自分を移動出来れば大能力者レベル4になれるんだつたよな、レポート空間移動能力者タイって）

と、

「なんだテメエ離せよ！」

犯人の最後の一人だろうか、バッグを担いだ男が小さな子供を車に連れ込もうとしている。

そして、それを必死で抑えようとする一人の少女。

「ダメ！ 絶対に離さないから！」

「クソが！」

ドンッと男がその少女を蹴り飛ばした。

悲鳴と共に、その女の子は地面に倒れる。

子供は無事だ。

だが、その少女は顔を蹴られた。

「許せねえな。その歪みっぷり」

そして、上尾桐戸は立ちほだかった。

道路の中央へで上尾桐戸は少女の前に立ち、逃走しようとしている車を見据える。

車は強盗に失敗した腹いせか、仲間をやられた腹いせか分からないが、そのまま逃走できたにも拘らず、車を横滑りさせ方向を転換させると、こちらを向いてエンジンを吹かせ始めた。

「そのの貴方！ どなたかは知りませんが一般人がこの様な事件に首を突っ込まれては」

「関係ない。これは個人的なことなんでね」

「はい？」

「女の子蹴られて黙っていられるほど、お人好しじゃ無いってことだ」

そして、風紀委員の少女は見た。

少年の両手から生み出された炎が頭の上を弧を描いて渦を巻いて繋がっている。

炎の橋。

さらにそれを圧縮するように頭上で合せ、

「威力は落としてやる、だから痛みで多少反省するんだな」

両手を前に向けて放つ。

「ヘキラゴン 極大閃熱呪文！」

巨大な閃光が両手から放たれた。

高エネルギーの熱線。

生身の人間に放つには、あまりにも巨大すぎる力。

だが、

轟！ という音と共に地面が爆発した。

上尾桐戸から放たれた閃光が男の運転する車に当たる直前で地面に激突したのだ。

巻き起こる熱波と爆音。まるで巨大な爆弾でも爆発したのではないかと思うほどの衝撃。

その爆風によって車は宙を弧を描いて吹き飛び、地面に激突。

甲高いクラクション音を鳴り響かせ、ボンネットから突っ込んだ

その車は、大破せずどうやら中の男も無事な様だった。

「す、すごい」

後ろで少年を助けた少女は、ぼそつと呟いた。

「何者ですの、あの男……？」

そう言われてようやく気がついた。

（あ……、目立ちすぎだよバカ！）

あああ、と頭を抑える上尾桐戸だったが、時すでに遅かった。

「あ、ありがとうございます！ その、助けてもらって」

少年を助けた少女はペコペコと頭を下げてくる。

「パイロキネシスト 発火能力者ですか！？ あの威力、レベル4 大能力者いや、レベル5 超能力者級で

したよね！？」

不味いことになってしまった。

無駄に介入しないつもりが、ものすごく注目を集める羽目になってしまった。

実際能力者ではない訳であって、さてさて、どうするか悩みどころである。

「ええっと……通りすがりの能力者ってことで」

それじゃあ！ と手を上げて

「レムオル！」

相手が発火能力者と思っっているので、それに似たモノを選択した。姿を消す力だが、相手から見れば、炎によって生み出した塵気楼に見えたであろう。

「え？ あれ??」

と、キヨロキヨロと上尾桐戸を探している様だが、それを他所に見えなくなつた上尾桐戸は走ることもなくその場を去っていく。

(まずい……顔覚えられたかも)

ただ、この学園都市には人口二三〇万も人がいて、その八割が学生だ。

そんな大人数の中、そう簡単に同じ人間には出会わないだろう。

と、そうなることを祈りつつ、上尾桐戸の学園都市での初日が終わっていく。

だからこそ、次の日にその少女と出会う事になるなど思いもしなかったであろう。

え？ 運命の出会いなんかじゃないよね？

## 主人公（前書き）

簡単な主人公紹介です。

## 主人公

・名前

上尾桐戸かみおきりと

柵川中学に在籍しているが、実際は転生者。学年は二年。

身長は一六五センチ、体重五三キロ。

黒髪短髪で、金髪であったり、ピアスを付けていたり、白髪だったり、などという様なモノはなく、特にこれといって特徴はない。

あまり目立ちたくない、と言う考えを持つ一方、正義感は強く、実際に強盗現場を目撃した時も目立つと分かっている、その場に飛び出し能力を使用した。

・能力

詠唱呪文

この世界とは異なる方式であるため、下準備を全くと言ってよいほど行わずとも詠唱だけで発動する事ができる魔術だが、詠唱できなければ発動することは出来ないと言うデメリットもある。

「うううう。なんだ、この疲労感は……」

朝、目が覚めると上尾桐戸はグダリそうな疲労感に襲われていた。「なんだよ……必然的に使ったパワーは寝たら回復しますって設定じゃないの!? それとも時差ボケか!? 転生してきたから元の世界とは時間帯が違ってましたってオチか??」

何にせよ、時間は七時三〇分。

そろそろ起きなければ、『学校』に間に合わないのだ。

(気持ち的には転校生でいいのか? でも元々所属してた訳だから、そんな事ないか)

柵川中学はこの寮と同じく第七学区に存在するので、少なくとも八時前に出発すれば間に合う。

なので、取りあえず腹ごしらえするためにキッチンへと向かった。食器類が極端に少ないキッチンだが、よく使用していたのか、トースターだけは良く使い込まれたある様に見える。

それを証明するかのように、棚には食パンの他、イチゴジャム、オレンジジャム、ママレードジャム、ココアジャム、チョコジャム、ピーナッツジャム、モンブランジャム、ジャムジャムジャムジャム……。

取りあえず、数多くのジャムがきちんと並べられてあった。

「……綺麗すぎなんだな、俺……。さあて、今日は何ジャムにすっかなあつと」

何気にモンブランジャムが目に入ったので今日の朝食はそれに決定した。

教室に着いた時に辺りがざわついていたので昨日の噂がもう回ってしまったのか、と上尾桐戸は一瞬ドキッとしたがどうやらそうではないらしい。

システムスキャン  
身体測定。

原因はそれだった。

学期末に行われる能力判断テスト。その成績によって各々の能力やレベルが定められる為、学生にとっては大一番の行事と言っても過言ではない。

(どうしたもんかな)

そんな中、測定の為の教室の前で上尾桐戸は腕組みをしながら考え事をしていた。

(問題はまず、どうやってこの身体測定を行なっていくかだよな)

上尾桐戸の力は超能力ではない。

故に、この身体検査では測定出来ない可能性がある。

(いつその事、発火能力者を装ってみるか？ いや、それなら無能力者の烙印を押された方がこれから行動しやすいか)

もし、測定不能であるにも拘わらず、能力を発動したならば、それこそ問題になりかねない。

科学で証明出来るはずの超能力とは異なる方式がある。なんて事がこの学園都市に広まる事はなるべく避けたい。

(目立つのは嫌だからな)

よし、とそのドアを開ける。

行われていたのはカードの裏の模様や数字を当てる透視能力クレアポヤンスの測定であったり、念動力サイコキネシスによって鉄を折り曲げる、と言った測定だ。

(って言うか、俺の能力使ってもこれは出来ないな)

無能力者の烙印を押すことに決めた上尾桐戸は難なくそれらの測定をパスしていく。(出来なかったと言う事)

あっという間に測定を終えた上尾桐戸は教室へ戻るべく廊下を歩いていた。

結果は聞くまでもなく無能力者だろう。

「取りあえずはこれで様子見だな」

この学校に在籍していたと言う記録はあるが、実際の所気分的には今日が初登校なのだ。

教室での席は窓側の一番後ろ、と言う後から付け足された感じは十分にあつたが、それでも挨拶をしてくるクラスメイトが何人かいたので、前々からこのクラスの学生と言う認識はされているようだった。

だからこそ、変に目立つたり特別な事をする必要もない。

とにかく、まずはこの転生した世界で、この学校で自分がどんな立場だったのかわ知る必要がある。

と、下駄箱の辺りに差し掛かった所で、外が騒がしい事に気がついた。

(なんだ?)

ちょうど運動場の辺りからだった。

「確か、外でも身体検査をしてる学生がいるんだっけ」  
にしても、沢山の学生が集まっていた。

何かを見学している様だったので、上尾桐戸も運動場へと足を運び、その集団が目を向けているモノを確認することにした。

「何を見てるんだ?」

たまたま隣にいた学生に質問する。

「ああ、二年の二河辺木竜にかへきりゆうが身体測定するんだって」

「二河辺?」

「エレクトロマスターレベル3の電撃使いの強能力者だよ、レベル4大能力者目前って言われてる。この学校じゃ色々と有名だろ?」

そう言われて視線を先に向ける。

と、

『最大出力一億ボルト。発動速度一・二秒。着弾分布二五・六ミリ。総合評価大能力者レベル4』

アナウンスと共に歓声にも似た声が沸き上がる。

「等々うちの学校から大能力者が」「ムカツク奴だけどスゲエゼ」  
中心にいるのは、茶髪のショートヘアーにメガネ、身長は一六〇  
の後半と言った所だろう。

「あれで性格がよければ柵川のエースって言われるんだろうけど」  
そう誰かが呟いた瞬間、

バチバチ！ と周囲に電気の槍が飛び散った。

ワァ！ キヤ！ と言った悲鳴を上げて伏せる生徒たち。

「外野が一々うるさいんだよ」

メガネの歪みを中指で直し、二河辺木竜は周りを見渡す。

「まあ、これで僕もようやく大能力者の一員になった訳だし、記念  
に誰か一発焦がそうかな？」

バリバリバリ！ と二河辺を中心に稲妻が渦を巻き、そして地面  
を走る。

周りで見ていた生徒に当たることは無かったが、出力一億ボルト。  
多少の手加減はしているだろうが、それでも当たれば唯では済まな  
いだろう。

身体測定を受け持っている教師が注意するも、二河辺は聞く耳を  
持とうとしなかった。

それどころか、うずくまったり逃げるように離れていく生徒を見  
ながら二河辺は小さく笑う。

「僕があレベルガンの超電磁砲を超える日も近いかもな」

「貴方じゃ無理だと思っ」

その場にいた全員がギョツとした。

言ったのは一人の少女だった。

「ちよつと佐天さん!？」

「能力をそんな風に使う人が御坂さんを超えられるはずない」

「誰が超えられないって？」

バチン！ と少女の足元に雷撃が落ちる。

「きゃっ」

と、少女は尻餅をついた。

「へえ。君、超電磁砲と知り合いなんだ。なんか特殊な能力でも持っている訳？」

「そんなのない。私、無能力者だから」

「は？ 良くそれで相手してもらえたね」

二河辺は皮肉に笑いながら、

「超能力者が無能力者を相手にするなんて、からかわれてるんじゃないの？」

「御坂さんは貴方みたいに低能力者をバカにしない。例え無能力者だったとしても対等に接してくれる人だから」

二河辺はそこまで聞くと、表情を変えた。

嫌気が指したような、面倒くさくなつた顔。

「はあ、とバカにしたようなため息を吐いて、

「それだけじゃ僕が超電磁砲を超えられない理由にならないし、取りあえず君、記念に焼く」

バチバチと火花を散らして、体から放電が始まった。

自分を中心に円を描くように散らばっていた電撃が、二河辺の前に出した手のひらに集まっていく。

発動速度一・二秒にも拘わらず直ぐに放たないのは、相手に後悔させる時間を与える為か、それとも演出なのか定かではないが、  
「つたく、こんな奴つて分かってるなら近づくなよな」

ん？ と二河辺が振り返ると、

「何だい君は？」

「ああ、気にしなくてもいい。単なる通りすがりの無能力者だから目立つと分かりつつ、上尾桐戸はまだ首を突っ込んでいた。

（誰も助けに行かないんだから仕方がないとは言え、目立ってるよなあ……。まあ、相手がこの学校のエースみたいなモノだから、誰も手を出せないのは分かってるけど）

「何だ、君も焼かれないのか？」

ラナリオン

「何？」

「気にしなくていい、ただの独り言だから。それよりも、そんな事してる暇ないかもよ？ ほら」

と、上尾桐戸は上空を指さして

「雨降って来るかもよ？」

ポツリ、と言葉と同時に二河辺の鼻先に雨粒が当たった。

ポツポツと雨粒が降り注ぎ、徐々に勢いを増していく。

周辺にいた生徒達は校舎へと走って行く。

「ちっ」

舌を打って二河辺も校舎へと向かって走っていった。

「あんたも早く校舎に入った方がいい」

よ、と言って初めて気がついた。

「あっ」

その少女が昨日、強盗事件の際にいた少女であったことに。

数秒、雨に打たれているにも拘わらず立ち止まる。

まさか、同じ中学に所属しているとは思いつかなかったのだ。

加え、少女は昨日上尾桐戸が能力を使って強盗犯を撃退している

場面を目撃しているのだ。

それも超能力者級の能力を使っている所を見られている。

にも拘わらず、無能力者と名乗っては、おかしいと思われる

当然だ。

「雨……雨だから早く校舎に入ろっ」と

と言いながら、上尾桐戸は逃げるように校舎へと向かう。

(不味い……あの大能力者と関わった事なんかよりも、あの女の子

の方が不味い……)

「あーっ」

と数秒遅れて後方から声が雨を通り越して聞こえてきたが、そんな

のはお構いなしに上尾桐戸は校舎へと飛び込んでいった。

無能力者で突き通すつもりが、さてさてどうする？

それにしてもおかしな雨だったと初春飾利は思う。

今日の天気は一日晴れだったはずなのだが、

ツリータイアケラム

(樹形図の設計者の予測が外れるなんて、そんな事もあるんですね)

再度、ケータイを開いて天気予測を確認した初春は、雨の上がつた空を眺めた。

身体測定は終了し、教室で待機している初春だったが、半数の生徒は予測と違った天気の所為で、制服や体操服を濡らしてしまったので、現在更衣室で着替えをしている。

運良く外に出ていなかった生徒だけ、こうして教室で待機をしていると言っ訳だ。

ガラガラ、と教室のドアが開いて、何人かの生徒が教室に戻って来た。

「あ、佐天さん」

セミロングの黒髪に白梅の花を模した髪飾りをつけた佐天涙子もその中の一人だ。

無能力者の彼女だったが、運動場で行われていた二河辺の能力測定を興味本位に見に行った事で、不運にも雨に見舞われてしまった。「大丈夫でしたか?」

加え、その二河辺に口を出した事によって危うく電撃を浴びせられる所だったのだ。

「大丈夫大丈夫って言いたいんだけど、正直言うところちょっと怖かったかな」

「ビックリしましたよ。佐天さんが二河辺さんに襲われる所だったって聞いた時は」

「いやーゴメン。でも許せなくてさ。力があるからってああ言う能力の使い方する人って。それも御坂さんを超えるなんて、そんな事

言い出すから」

でもね、と佐天は言い、

「いたんですよ、初春」

「誰がですか？」

「昨日の能力者が、この柵川中学に」

M a g i c - 2

どうしよう、と上尾桐戸は屋上から遠くを眺めていた。

(まさかあの女の子がこの柵川中学にいたなんて)

既に、下校の時刻を迎えている為、校門からはゾロゾロと生徒たちが帰っていた。

恐らくだが、今日行われた身体測定の結果について話しをしてながら帰っている生徒が多くいるだろう。

測定結果、無能力者。

そう書かれた紙をポケットにしまって、上尾桐戸は頭をかいた。

「無能力者の烙印を押すことは出来たけど、あの女の子に聞かれたらどう答えればいいのか？」

同じ中学にいたとなれば、関わらないと言う事は難しくなってくる。

増してや、この学校には大能力者が一人いるが、その他の生徒は無能力者や低能力者ばかりだ。

能力を見せなければ無能力者のままで押し通す事が出来るのだが、一度、能力を見られてはそれは難しい。

「いつその事全部話す、つてのはさすがに不味いか」

転生の事や魔術の事をこの学園都市の学生に話すのは問題がありそうだった。

ならばどうすればいいか。

「ああ、そうか」

ポン、と両手を叩いて

「手を抜いたって事にすればいいのか」

上尾桐戸は基本的にあまり目立ちたくないと言う考えを持っている。

つまりはそれを理由にして、上位能力者になるとどうしても目立ってしまうので、手を抜いている。

と言う事にしてしまえばいいと考えた。

それなら、身体検査では無能力者と診断されていながら、能力を使えると言う矛盾を一掃できる。

ただ、問題があるとすれば、

「でも、相手が無能力者だったらいい気はしないだろうな」

無能力者や低能力者達は皆力を欲しているハズだ。

学園都市で開発を受けている以上、能力を向上させ上のレベルへ上がりたいと思うのは皆当たり前であろう。

にも拘わらず、能力があるのに能力がないと偽る事は、無能力者達にとっては自分たちを侮辱していると取られる可能性も考えられる。

(それでも、秘密がバレるよりは増しか)

と、

屋上のドアがギョッと音を立てて開かれた。

下校時間だと言うのに屋上に来るなんて珍しいな、なんて思いながらも自分もその中に含まれている事に気がつく。

大方、身体検査の結果に納得がいかに風に当たりに来た生徒か何かだろう、と振り返って、

「誰の許可を取ってここにいるのかな？」

そこにいたのは二河辺木竜だった。

「聞こえなかったのかな？ 誰に許可を取って屋上に上がって来ているのかと聞いているんだけど」

「立ち入り禁止なんて看板は無かったけど？」

「そうじゃない。ここは僕のテリトリーだって言ってるんだ。勝手に入ってもらっては困るんだよ」

ああ、なるほどそう言う事か、と上尾桐戸は納得する。

要するに、ここは俺の縄張りだから出て行け。

そう言う事だ。

「ああ、悪かった。ここ、あんたのお気に入り場所だったんだな。確かにいいよな、ここ。風通しはいいし、景色もまあまあ」

「で、どうする？」

どうする、と言うのはどう落とし前をつけるか、と言う事だろう。明らかに強者のセリフだった。

この学校には自分に敵う者がいない。

だからこそ、彼にとって自分が中心となって物事が進んでいる。

俺の方が強いから、弱者のお前は どうするんだ？

そう言った意味が込められているのだろう。

当然、この学校は無能力者と低能力者がほとんどを占めている。

つまりは二河辺に敵う能力者は誰もいないと言う事になる。

そう言った状況で、他の生徒ならここでどういったセリフを吐くのだろうか。

「謝れば許してやらない事もないけど？」

恐らくはその一点だろう。

最大出力一億ボルトの電撃使い。そんな能力者を前に無能力者達ができると言えば謝る事くらいだ。

二河辺が皮肉な笑みを浮かべながら言うのは、そう言って顔を強ばせる生徒たちを見ることに楽しみを得ているからかもしれない。

性格がよければ柵川中学のEース。

運動場での一件と言い、今回の言動。

学校中の生徒が口を揃えて言うのも納得ができる。

「悪かった。今度からはちゃんと許可を取ってから入るよ」

軽くそう言って上尾桐戸はドアへと向かった。

運動場では仕方がなく前へ出たが、無意味に関わりを持つ必要も

ない。

そう思って、屋上を後にしようと思って、

「っていうか君、さつき運動場でも会ったよね？」

二河辺とすれ違った辺りで呼び止められた。

「……さあ、気の所為じゃないかな」

「それはないね。僕は気に食わない奴の顔は忘れない主義なんでね」

なんともイヤらしい性格だ、と上尾桐戸は心で呟いて、

「もしそうだったらどうするつもりだ？」

瞬間、頬を掠るように電撃の槍が飛んできた。

それが答えと言わんばかりに。

「へえ、驚かないんだね。でも、次は当てるよ？」

バチバチ、と音を立てて二河辺の手の平に電撃が集まっていく。

「大能力者が無能力者にそこまでムキにならなくてもいいんじゃないか？」

振り向いて上尾桐戸は言う。

測定上、無能力である事は既に伝えてある。

今日晴れて大能力者になった彼が、ここまでする理由は特にないはずだ。

「君にはさつき邪魔されたからね。理由はそれだけだよ」

「一つだけ言うけど、後悔するから止めた方がいい」

「君が後悔するんだろう？」

電撃の槍が容赦なく襲いかかった。

上尾桐戸向けて一直線に飛んでくる雷。

避ける事すらしようとしない上尾桐戸に二河辺は恐らく諦めたと思っただろう。

なにせこっちは一億ボルトの雷撃。

学園都市を探しても防ぐことが出来るのは一割にも満たない。

増して、こんな学校にそんな能力者などいない。

はずなのだが、

「マホステ」

それは、上尾桐戸に当たると同時に四方八方の飛び散った。

「なっ……！？」

二河辺は驚愕した。

雷撃をはじめられるなど、一ミリたりとも予想をしていなかったからだ。

「だから言っただろう。後悔するって」

「バカな、そんな事が……僕の雷撃を無能力者が打ち消したただと！？」

「まだ続けるのか？ 大能力者」

「ふ、何を言ってるんだい、今のはまぐれに決まってる。僕は大能力者だぞ、君みたいな無能力者とは違うエリートだ！」

「ああそうかい。なら一つだけ教えといてやる。表の数値だけが全てじゃない、たまには相手の痛みも知れ」

上尾桐戸は人差し指を上空へと向けると、雷雲が立ち込めた。

「雨雲！？ まさか、あの時の雲も！」

「ライティン 雷撃呪文！」

ズドン！ と稲妻が空より撃ち落とされた。

二河辺の体を駆け巡った電撃は周囲にも巻き散らかされ、火花を散らす。

吹き飛んだ二河辺は数メートル先で地面に倒れていた。

元々二河辺のいた場所はコンクリートがめくれ上がり、小さなクレーターが出来上がっていた。

「あんたの得意な電気だ。そんなにダメージは残らないだろう」

屋上と言う事もあって、ここで起こったことは二人しか知らない。二河辺の性格上、他人にここであったことを言う事もないだろう。

そうなれば、自分は無能力者に負けたと言う事になるのだから。

「しかし、少し派手にやりすぎたかな？ 誰か駆けつける前にさっさと御暇した方がいいな」

上尾桐戸は屋上のドアを開けるとそそくさと階段を駆け下りていく。

屋上であれだけの爆音が鳴り響いたのだ。まだ、学校内に生徒が残っているなら、何が起きたのか確かめに来る生徒がいるかもしれない。

二階にまで降りた上尾桐戸は走るのを止めて、何事もなかったかのように下駄箱へと向かう。

「よし、これで一先ず大丈夫だろう」

そう思いながら、下駄箱で靴を履き替えた上尾桐戸だったが、そこで思いもよらぬ人物と再会してしまう。

「あっ」

そこにいたのは、

「き、昨日の方ですよね!？」

二人組みの女の子だった。

それも、片方は昨日と今日二度にわたって助ける事になった少女。上尾桐戸の能力を使用している所を見た少女だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8726w/>

---

とある魔術の詠唱呪文

2011年10月2日16時30分発行